

貧乏コンプレックスレポート

こんにちは、ばっしーです。

このレポートでは、
僕がどのようにして「自分の力で稼ぐ」という道を切り拓き、大学在学中に月収500万円を実現するまでに至ったのか。

その背景にある、家庭環境や価値観の変化、そして何より“お金に対する考え方”の変遷を、正直に綴っていきます。

では、ここから始まります

僕が慶應義塾大学の4年生だった頃、
まわりの友人たちは皆、当然のように就職活動をしていました。

スーツに身を包み、企業説明会へと足を運び、ESや面接対策に追われる毎日。

でも、僕はその波には乗りませんでした。

正確に言えば、「乗れなかった」というより、「乗らない」と決めていたんです。

なぜなら、その時点で、すでに月収500万円を自分のビジネスで稼げるようになっていたからです。

「えっ、なんで大学生でそんなに？」

と驚かれることもあります。

けれど、そこに至るまでの道のりは、決して楽なものではありませんでした。

毎月数百万を稼ぐようになったと聞くと、

「きっと最初から恵まれていたんだろう」
「特別なスキルがあったんじゃないか」

そんな風に思われるかもしれません。

でも、実際はその真逆でした。

僕の原点にあるのは、“強烈なコンプレックス”と“心の渇き”でした。

「お金がない」という現実には、子ども時代から何度も心を折られました。

欲しいものを「欲しい」と言えず、食べたいものを「食べたい」と言えない。

言ったら怒られる。わがままだと叱られる。

そんな日々を過ごすうちに、僕の心はどんどん固く、閉じていきました。

でもその閉じた心の奥に、ずっとくすぶっていた感情がありました。

「いつか見返してやる」

周囲を黙らせるほどの実力と、圧倒的な自由を手に入れてやる。
それが僕の静かな誓いでした。

そして、大学生活の中で、僕は「ネットビジネス」という世界に出会いました。

最初はただの好奇心でした。

でも調べていくうちに、驚いたんです。

そこには、会社や誰かに依存せず、自分の力で人生を切り拓き、
お金も時間も自由に手に入れている人たちが、本当にたくさんいた。

「こんな生き方があるのか…」

それは、僕が今まで見たことのない世界でした。

惚れました。

その自由さと、生き様に。

同時に、これまで自分が抱えてきた陰鬱な人生に、
終わりを告げたいという気持ちも強くなっていきました。

——このままじゃ終われない。

この世界に飛び込もう。

そう、決意したんです。

気づけば、生活が少しずつ変わっていきました。

バイトをしなくても暮らせるようになり、
やがて、通帳の数字がぐんぐん伸びていくようになりました。

そして、いつしか確信しました。

「ああ、もう僕は、就職しなくていい」

喜びよりも先に、安堵がありました。

肩に乗っていた重りが外れたような感覚。

同時に、自分を笑っていた人たちの顔が浮かんで、
少しだけ、ニヤリとしてしまったのを覚えています。

でも、それ以上に大きかったのは、

「人生って、こんなにも変えられるんだ」

という感動でした。

ここから、物語は一気に動き出します。

けれど、その前に――

なぜ僕が、そんなにお金にこだわったのか。
なぜ、素直になることができなかったのか。

それは、僕が過ごしてきた“貧困と恐怖に支配された子ども時代”と、
深くつながっています。

素直じゃなかった僕

今こうしてレポートを書いていると、まざまざと思い知らされる。

――僕は、本当に「素直じゃない人生」を歩んできたんだなと。

欲しいものがあったても、「欲しい」って言えない。

誰かに優しくされると、心のどこかで「申し訳ない」と思ってしまう。

何かを奢ってもらえば、「あとで請求されるんじゃないか」と不安になる。

そんな自分が、僕は本当に嫌だった。

「そんなこと、あるわけないだろ」
って頭では分かってる。けど、心がついてこない。

ケチな家庭環境、そして貧しさが染み込んだ価値観は、
僕の中に“恐怖”を植えつけていた。

しかも、それはどんどん僕の人格をむしばんでいく。

思考も、感情も、すべてが歪んでいった。

——価値観って、怖い。

それ次第で、人は簡単に変わってしまう。
自分を正しいと思い込んで、間違いに気づけなくなる。

実際、僕は「貧乏なこと」にすら、ある種の“誇り”を持っていた。
なんでもケチってやりくりできる自分に満足してた。

たとえば、小学生のころ——
一年中、半袖半ズボンだった。もちろん寒かった。
母がフリマで買ってきた服。
正直、不満だった。けど、言わなかった。

「寒くないし？むしろ強くね？寒いとか言ってる奴、雑魚じゃん」
——そうやって、自分をだましてた。

本当は、暖かい服が欲しかった。
でも、そう言っても手に入らない。
否定されるだけなら、最初から言わない方がいい。

だから僕は「欲しい」と言えない人間になった。

そうやって、自分を守っていた。
でも同時に、どんどん「可愛げのない子ども」になっていった。

喜ばない、甘えない、求めない。
そんな子ども、誰だって距離を置きたくなる。

気づけば僕は孤立していた。
別に友達がゼロだったわけじゃない。

でも、なんとなく避けられることが増えた。
いじられる。見下される。笑われる。

それでも僕は言い続けた。

「平気だし」「友達なんかいないし」——と。

ほんとは違うのに。
でも、もう引き返せなかった。

「欲しい」と言えない人生は、
「欲しかった」とも言えない人生になる。

そうやって、自分をどんどん縛っていた。

やがて、貧乏とケチとプライドが渦巻く中で、
僕は少しずつ壊れていった。

中学の地獄、そして出会い

中学に上がっても、僕は「素直じゃない自分」を脱げなかった。
もちろん、貧乏も変わらなかった。

むしろ、周囲との格差はますます広がっていった。

僕が住んでいたのは、横浜の“はずれ”。
いわゆる田舎で、同調圧力が異常に強い地域だった。

ちょっとでも周りと違えば、すぐに「仲間外れ」になる。

実際、僕は“あれ”を持っていなかった。
——モンスターハンター。PSP。

それだけで、僕は省かれた。
クラスの輪の外に、ポンと置かれた。

持ってないから、興味ないふりをした。
でも内心は、悔しくて、寂しくてたまらなかった。

そして、盗まれた。

僕の持ち物——ばあちゃんが買ってくれた、大切なペンやゲーム。
それを平気で盗む連中がいた。

しかも、それを注意すれば、暴力が返ってくる。

「返せよ」

「は？俺のだよ、キモいな」

殴られ、倒され、それでも返ってこなかった。

先生に相談しても、何も変わらなかった。

「見て見ぬふり」——それが学校という場所だった。

心が、ポキッと折れた。

何より辛かったのは、ばあちゃんに申し訳なかったこと。

年金暮らしの中、僕のために買ってくれたもの。
それを盗まれて、僕は何もできなかった。

家に帰って、ひとり、布団の中で泣いた。

この頃からだ。

学校に行けなくなったのは。

毎朝「腹痛い」と言って、母を見送り、
ひとりでドラクエをやっていた。

ブックオフで安く買った、中古のドラクエ。

ゲームに逃げたというより、
現実が“地獄”すぎて、逃げ場が他になかった。

それでも、毎日感じていた。
——罪悪感。虚無感。どうしようもない焦燥。

どこにも居場所なんかない。
僕のことなんか、誰も本気で見てくれない。
そう思っていた。

だけど、ある日。
ひとりの“大人”が、僕の前に現れた。

塾の先生だった。

僕の惨状を見かねた母が、半ば強引に連れてきた。
顔色は悪く、目は死んでいて、
世界全体を恨んでいたような14歳の僕を。

その先生は、真正面から僕に言った。

「お前、学校が嫌なら抜け出せよ。
でもな、そのためには“戦う力”がいる。
このままじゃ、何も変わらん。
いい高校に行けば、暴力で殴られることもなくなる。
学歴ってのは、最も手っ取り早く“評価”を変える武器だ。
日本は資本主義社会だ。
勝ちたきゃ、勉強しろ。」

その言葉に、僕の心は揺れた。

こんなに真正面からぶつかってきた大人なんて、初めてだった。

僕は先生を信じてみることにした。
そして、「この人生を変えてやる」と決めた。

目指すのは“底辺高校”ではなく、“難関高校”。
——まさに、無謀な挑戦だった。

でも、僕は受験生になった。
中学3年、6月。ようやく“戦い”が始まった。

当然、簡単じゃなかった。
I can fly の「can」って何？ってレベルからのスタートだった。

助動詞？主語？述語？
意味が分からなくて、頭を抱えたことも数えきれない。

それでも、ひたすらプリントをやった。
何度もくじけそうになった。
だけど、先生は見捨てなかった。

時には激怒された。

「クソガキが社会をなめんな！！」

本気で叱ってくれた。

その怒鳴り声に、僕は涙が出そうになった。
ああ、この人は僕のこと、本気で考えてくれてるんだなって。

母も、ずっと味方でいてくれた。
先生を連れてきてくれたのも、母だった。

あの時、僕に“目標”ができた。

「高校に合格する」という目標。
人生で初めて、目指すものができた。

——それは、僕の“希望”だった。

僕は、ケチな価値観に染まり、
友達も、自由も、信用も、失っていた。

でもその時、僕は一つ手に入れたんだ。

「信じていい大人」と「変われる可能性」を。

あの時の先生との出会いが、
僕の人生を、ほんの少しだけ“前向き”にしてくれた。

バイト地獄とケチの呪い、そして慶應へ

慶應大学に3ヶ月ちょいで合格した僕から見て——

あの中学生時代にやっていた勉強法は、正直「非効率」の極みだった。

でもね、あの頃の僕にとっては、それでよかったんだ。

むしろ、効率とかそんなものよりも、「何かを始めること」そのものが必要だった。

当時の僕は、生きる意味すら見失っていた。

「なんのために生きてるんだろう？」

そんな問いを、毎日毎日、心の中で繰り返していた。

でも——高校受験という“目標”が、僕に生きる意味をくれたんだ。

その一点において、あの勉強法は十分すぎる価値があった。

不登校だったからこそ、毎日ずっと勉強に時間を使えた。

その結果、僕は塾の先生とともに、第一志望の高校に合格できた。

そして——入学初日。

僕はその学校に、衝撃を受けた。

暴力なんてない。

窓ガラスが割れることも、授業中に竹刀で殴られることもない。

万引きが“カッコいい”なんて風潮もない。

みんな静かに勉強していた。

その空間は、小中学校とはまるで別世界だった。

初めてだった。

「僕は孤立してない」と思えたのは。

でも、やっぱり根深かった。

“ケチ”という呪いのような価値観は——僕を縛り続けていた。

周りの友達は、みんな普通にお金を使っていた。
別荘を持ってる子、家に馬がいる子、外食は日常。
それが当たり前の世界。

だけど僕は、190円のラーメンにワカメを足して、
「ワカメは腹が膨れるからな！」って、ドヤ顔で言うしかなかった。

誰もそんな僕をバカにはしなかったけど、
心のどこかで、自分が惨めで仕方なかった。

体重は55キロしかなかった。
ガリガリで、体力もなかった。
でも、節約が美德だと思い込んでた。

そして僕は、高校生になってアルバイトを始めた。

お金が欲しかった。
誰よりも、何よりも、それが欲しかった。
だから、時給が高いパン工場働くことにした。

——そこは、地獄だった。

冷蔵庫のようなマイナス5度の部屋でイチゴのヘタを取る。

逆に50度以上の部屋でフランスパンを管理する。
毎日1000個のカステラを、延々とひっくり返す。

まさに“奴隷労働”そのものだった。

だけど僕は思った。

「これが働くってことだ」

「これが社会ってもんだ」

「辛いのが当たり前だって、みんな言ってるじゃないか」

思考を停止させて、毎日8時間、ただ黙々と働いた。

カステラの甘い匂いが嫌いになった。

今でもあの匂いを嗅ぐと、あの頃を思い出して吐き気がする。

でも、7200円もらえた。

僕にとっては、それがすべてだった。

毎日、時間も、身体も、心も——全部をお金に差し出していた。

親に頼れない僕には、それしか選択肢がなかった。

周りの友達から「金の亡者かよ」って言われたって関係なかった。

僕の苦しさは、誰にもわからない。

そんな僕も、大学受験の時期が来て、バイトを辞めた。

そして——慶應大学に合格した。

でも、そこにいたのは、

「本当の金持ち」ばかりだった。

高校の時よりも、もっと上の世界。
「年収1000万円？ それくらい普通だよな」っていう空気。

心の底から、悔しかった。
何も知らない人たちが、何の苦労もなく大学にいて、
僕だけが、人生のスタート地点からボロボロだった。

——でも、運命はまた、僕を導いてくれた。

それは、ある冬の日。
靴に水が染みるほどの雨の日だった。

その日、僕は“ある人”と出会った。

この出会いが、僕の人生をまるっきり変えることになる。

雨の日の出会いが、僕の価値観をすべて壊した

あの日も、冷たい雨が降っていた。
靴の中まで水が染み込むような、どうしようもないくらいの大雨だった。

でも——

その最悪な天気の中で、僕は人生を根底から変える出会いを果たす。

その人との出会いが、
僕を“起業家”という、これまでとはまるで違う世界へ導いてくれた。

それまでの僕は、
「働くとは、苦しみに耐えてお金をもらうこと」
そう信じて疑わなかった。

だけど——

その人が話す言葉は、僕の常識をひっくり返した。

「働かなくても、稼げる世界があるんだよ」

「仕組みを作れば、お金は自動で入ってくるんだ」

...最初は、信じられなかった。
そんなうまい話があるわけがないって。

でも、僕は直感でわかったんだ。
この人は、本物だ——と。

だから、怖かったけど、飛び込んだ。
3月から、ビジネスを始めた。

そして——
たった1ヶ月後、僕の月収は120万円を超えた。

.....正直、意味がわからなかった。
自分でやってることなのに、現実味がなかった。

だって、時給900円でパン工場で働いてた僕がだよ？

120万円って、工場でなら**1,200**時間も働かないと稼げない。
1日8時間働いても、150日——約5ヶ月ぶっ通しだ。

それが、たった1ヶ月。
頭がおかしくなりそうだった。

あの頃の“ケチマインド”が崩壊した瞬間だった。

「今までの価値観、全部ウソだったんじゃないか...？」
「親は、なぜあれほどまでにお金をケチったんだろう？」
「何も知らないって、ここまで損をすることだったのか？」

このとき、僕は初めて知った。

「知識こそが、最大の武器」だということを。

何を知っているか。
そして、それを誰から、どんな環境で学ぶか。

それだけで、人生がまるごと変わってしまうんだ。

僕はその後も学び続けた。
学びながら、実践し続けた。

そして、半年後には月収200万円。
1年後には月収500万円にまで達した。

大学に通いながら——
毎月500万円を稼ぐようになっていた。

僕は何か特別な才能があったわけじゃない。
パソコンのスキルもなかったし、SNSのフォロワーもいなかった。

だけど、“原理”を学んだ。

ビジネスとは何か。
お金とは何か。
価値とは何か。
仕組みとは何か。

原理——つまり、本質。

この“本質”を理解して動いたからこそ、
一見、非現実的な成果も“再現性ある現実”として手にできた。

今、僕が稼いでいるのは「インターネットビジネス」だ。

インターネットが僕の代わりに、価値を提供してくれて、
その対価として、僕の口座にお金が入ってくる。

1日中作業をしているわけじゃない。
むしろ、1日1時間しかパソコンを触らない日もある。

時には何もしなくても、収益が上がる日だってある。

昔の僕には信じられなかっただろう。
だけど、これが現実なんだ。

しかも、それを実現するのに必要な専門スキルなんて、いない。

メールが使えて、文字が打てれば、十分。

最初は、僕も怖かった。
「プログラミングできないし...」とか、「PC苦手だし...」とか、
そんな理由を並べて、逃げようとした。

でも、逃げない自分になってから、世界は変わった。

わからないことがあれば、調べればいい。
それでもわからなければ、プロに聞けばいい。

昔の僕なら、
「それってお金かかるでしょ？ 勿体ない」って思ってた。

でも、今なら断言できる。

ケチることのほうが、よっぽど“高くつく”。

独学で迷って、時間だけ浪費して、
それでもわからなくて、結局やめて――

そんなの、何よりももったいない。

「迷ってる時間」がどれだけ人生のブレーキになるか。
僕は、身をもって経験してきた。

だから今は、必要だと思ったら、迷わずお金を使う。

知識に投資する。

人に聞く。

ツールを買う。

時間を買うという意識を持っただけで、
人生は驚くほどラクになる。

僕は今、ボイストレーナーに師事しているけど、
プロの指導を受けることで、自分の成長スピードが明らかに変わる。

昔の僕は、独学が正義だと思っていた。
だけど、今の僕は言える。

「独学ほど、効率の悪いものはない」と。

お金は単なるツール。

お金で時間を買えるなら、いくらだって払う。

そして、時間が増えれば、
僕はさらに新しいチャレンジができる。

迷いが消えると、行動が加速する。
行動が加速すれば、人生は一気に動き出す。

そして気づけば――

僕は“金に縛られていた人生”を、完全に脱出していた。

でも、これは僕だけの話じゃない。
誰にでもチャンスはある。

ただ、「やる」と決めるかどうか。
その一歩を踏み出せるかどうか。

それだけなんだ。

“知ってるか、知らないか”で未来は決まる時代に

僕は、自分の人生がたまたま好転したからこそ、今は自由に生きている。

だけど、ふと思うことがある。

「もしあのとき、行動していなかったら...？」
「もしあの出会いがなかったら...？」

きっと今も僕は、
時給900円の工場で、
カステラをひっくり返しながら、

「お金がない」と嘆いていたかもしれない。

そんなことを考えると、ゾッとする。

……だからこそ、今の社会の“格差”が本気で怖い。

努力しても、勉強しても、
“知っていなければ”報われないことが増えている。

この日本に生きていても、
もう「頑張ればなんとかなる」なんて、幻想だ。

格差は、確実に広がっている。

当時の僕みたいな大学生でも、年収1000万円を超える時代。
しかも、それが特別な話じゃない。

同じ大学の中にも、SNSやビジネスで稼いでいる学生はゴロゴロいる。
中には月収1000万円に届くような人もいる。

一方で、

朝から晩までバイトして、月10万円も稼げない学生もいる。

どちらが偉いとか、そういう話じゃない。

ただ――

「知っているか、知らないか」
それだけで、人生がまったく違う方向へ進んでいく。

情報格差。
そして行動格差。

この2つが、
今の社会を大きく分断している現実なんだ。

テレビや新聞では、まだこう言うかもしれない。

「いい大学に入って、安定した職業に就けば安心です」って。

でも——

皆さんも、もううすうす気づいてるんじゃないだろうか？
それ、本当に“安心”なのか？と。

僕の目の前にいるのは、
一流企業に就職しても、
心を病んで辞めていく人たちだ。

大学まで頑張ってきて、いい会社に入って、
「これで一生安泰だ」と思ったその先に、
待っていたのは、果てしない残業と、減らない借金と、
会社都合の理不尽だったりする。

一方で、

たった1年で月収100万円以上を稼ぐ、
“名もなき起業家”たちがどんどん増えている。

年齢なんて関係ない。
学歴なんて問われない。

ただ——
「知って」、「動いた」
それだけで、人生がひっくり返っている。

僕がその証拠だ。

だから、皆さんにも本気で伝えたい。

この社会で生き残っていくためには、
“自分で稼ぐ力”が絶対に必要になる。

もう、誰かに雇われていれば安心なんて時代じゃない。

これから10年後、20年後、
日本はもっと厳しい時代に突入する。

社会保障はどんどん削られ、
年金も期待できず、
税金と物価だけが上がっていく。

国も、会社も、誰も僕たちを守ってはくれない。

じゃあ、どうすればいいか？

答えは1つしかない。

「自分の力で、稼ぐスキルを身につけること」

それは、別に“起業しろ”って意味じゃない。

副業でもいい。

バイトじゃなく、収入の柱をもう1本持つ。

たとえば、

文章を書くスキル。

SNSで発信する力。

ブログで情報をまとめる力。

メルマガで価値を届ける力。

インターネットを使えば、

“仕組み”さえ作ってしまえば、

寝ていても、遊んでいても、お金が入ってくる。

信じられないかもしれないけど、

それは僕が現実に体験してきた世界だ。

もう、あの頃の僕のように、

「ケチマインド」で損をしてほしくない。

知識をケチるな。

時間をケチるな。

“未来”をケチるな。

僕たちは、行動した分だけ自由になれる。
そして、何歳からでも逆転できる。

だから、どうか。

チャンスに手を伸ばせる人であってほしい。

迷っている間に、
そのチャンスは他の誰かのものになってしまうかもしれないから。

素直になれた僕

綺麗事なんて、もう言っていられない。

日本は資本主義の国だ。
お金があれば、人生の99%は解決できる。

「人生はお金じゃない」と言う人もいるけど、
それは、すでに“ある程度”のお金を手にしてる人の話なんだ。

出会いが欲しくても、お金がなければフットワークなんて軽くない。

美味しいご飯を食べたくても、
日々の仕事に追われていたら、食べに行く時間すらないかもしれない。

でも、そういう悩みって、結局は「お金」が解決してくれる。

かつての僕は、目先のお金にだけ執着して、
未来を見ようとしなかった。
だけど今は違う。

あの頃の自分には見えていなかった世界が、今の僕にははっきりと見えている。

たとえば、本を読み漁って、
その知識をビジネスに落とし込んで、
市場で実践して、収入が上がる瞬間のあの感覚。
あれは何にも代え難い快感だ。

情報にお金をかけて、
それがさらに大きなお金となって返ってくる。
そんな世界があるなんて、昔の僕には想像もできなかった。

サラリーマンとして生きていたら、きっと得られなかった実感だと思う。

学べば学ぶほど収入が伸びていく。
そのたびに、自分の周りの人間関係も少しずつ変わっていった。

気づけば、
以前なら絶対に会えなかったような人たちと、
普通に会話をするようになっていた。

自分がどれだけ「お金に縁がない世界」にいたのか、
今になって痛いほどわかる。

「周りの5人の平均年収が、自分の年収になる」

この言葉の意味を、ようやく実感できるようになった。

人は、価値観に引っ張られて生きていく。
「稼げない価値観」に染まっていれば、当然稼げない。
逆に、「稼げる価値観」を受け入れて、正しく動けば、お金は自然と集まってくる。

だけど僕のように、
ケチな家庭で育って、
ケチな価値観にどっぷり浸かっていると、
お金の情報に触れることすらできない。

むしろ、自分からそれを遠ざけてしまう。
自分とは違う考え方を、認めたくなかったから。

だって、僕は時給900円のバイトで生きていた。
「そんな稼げる世界があるわけがない」
そう信じ込んでいたんだ。

でも、そんな世界はちゃんと存在していた。
そして僕は、思い切ってその世界に飛び込んだ。

ネットビジネスを入口にして、
資本主義の本質に触れる世界に足を踏み入れることができた。

『金持ち父さん貧乏父さん』で語られる、
「ビジネスオーナー」「投資家」「自営業」「従業員」
この4つの分類すら、僕は知らなかった。

でも、知った瞬間、すべてが腑に落ちた。

お金に対して本当の意味で自由になれるのは、
従業員じゃなかったんだ。

僕は、自分がどれだけ「縁遠い場所」にいたかをようやく知った。

このレポートでは、
僕がどれだけケチで、
どれだけ素直じゃなくて、
どれだけ損ばかりしてきたか、
そして、どんな風に考えが壊れて、
どんな風に世界が変わったかを、全部書いてきた。

そして最後に、どうしても伝えたいことがある。

今の僕には、両親への恨みはもうない。
「好きか嫌いか」と聞かれたら、正直、まだ「好き」とは言えないかもしれない。

でも、母は学費を稼いでくれた。

父は僕に学費を払う気なんて一切なかったけど、
その分、母が支えてくれたから非行にも走らなかった。

そこだけ見ても、母には本当に感謝している。

そして、不登校だった僕を、
人生を変えてくれた先生のもとへ導いてくれたのも母だった。

僕は運が良かった。
出会いに恵まれた。
素直になれる環境を、ギリギリのところで与えられた。

「運＝試行回数 × やり方」

これは、僕が信じている数式だ。

正しいやり方で、何度も挑戦すれば、運は味方してくれる。

でも、間違った方法で何度もやれば、心はボロボロになる。

だから、正しいやり方を学ぶのは本当に大切だ。

汗水垂らす努力も素晴らしいけど、
方向を間違えていたら、ただ消耗するだけになる。

努力が報われないことは、あまりに残酷だ。

そして僕は、ようやく「素直」になることができた。

お金が欲しい。
認められたい。
女の子にモテたい。
学歴だって、スキルだって欲しい。

そう思ってるなら、堂々と言えればいい。

人に迷惑をかけるようなことじゃなければ、
「欲しい」と言っていんだ。

そのために努力すればいい。

顔色を伺って、
欲しいものを我慢して、
平気なふりして、
本音を押し殺す。

そんな生き方よりも、
素直に、自分に正直に、
努力して生きていく方がずっと健全だ。

お金は、人生を変えてくれる。
時間も買えるし、出会いも広がる。
知識だって、お金で加速できる。

僕は、やっと自分の感情と向き合うことができた。

そして、皆さんにも、そうなってほしいと心から願っている。

長くて拙いレポートを、
ここまで読んでくれた皆さんへ。

本当にありがとう。
感想は、いつでもお待ちしております。

ばっしー

【追伸】

ここまで読んでくださった皆さんへ。

長い文章に最後まで目を通してくれて、本当にありがとう。

正直、自分の過去を書くのは怖さもあったけれど、
だからこそ、今の僕の「本音」を全て出すことができました。

そしてもし、
今の自分を少しでも変えたいと思っている方がいたら——
昔の僕みたいに、心のどこかで「このままじゃダメだ」と感じている方がいたら、

もう一歩だけ、踏み出してみませんか？

僕が変われたのは、環境を変えたからです。
素直に「学びたい」と思い、「稼ぎたい」と思い、
それに正直になれたから、人生が変わり始めました。

そんな僕が今、
本音で語っているメールマガジンを発行しています。

このレポートの続きも、
僕の日常や、ビジネスのリアルな話も、
そして読んでくれる皆さんと一緒に「成長していくこと」も、
すべてこのメルマガの中に詰め込んでいます。

僕と一緒に、

素直に、自分らしく、生きるための一歩を踏み出したい方へ。

ぜひ、こちらから登録してみてください。

👉 [ばっしー公式メールマガジン](#) (登録無料)

[メルマガ登録はこちら](#)

登録してくれた方には、感謝の気持ちを込めて、
「本気で人生変えたい人へ」に向けた限定コンテンツもお渡ししています。

今の延長線上じゃ見えない未来を、
一緒に手に入れましょう。

皆さんとメルマガで繋がれる日を楽しみにしています。

——ばっしー